



下和泉小だより

横浜市立下和泉小学校

校長 船木 淳

新緑が深まる校庭の芝生や木々の中、50周年記念植樹で植えたハナミズキが白い花を咲かせています。植樹から2か月。植物のたくましさに驚きを隠せません。

今年度から導入した「家庭と学校の連絡システム（すぐーる）」について、ご協力ありがとうございます。4月中に全家庭の登録が終わり、スムーズに運用が始まっています。今後は学校からの配信だけでなく、アンケート機能を利用したり参加承諾書として活用したりしていくなど、双方向の連絡ツールとして運用することも想定しています。紙面と配信で連絡していた「学年だより」は、6月から「すぐーる」での配信のみに変更します。ご理解のほど、よろしくお願いします。

子どもたちの活動に花が咲き、実がなるのは時間がかかります。6年かけて根をのばし、強くしなやかな幹を育て、豊かな葉を広げることこそ、私たちに求められていることではないでしょうか。それは、例えばこんな物語です。

本校では昨年度から、1年生と6年生の日常的な交流とその中でのお互いの成長を目指し、1年生の教室を6年生が両サイドから挟み、意図的な関わりの場を創出してきました。登校するところから交流が始まり、1年生は6年生に包まれる安心感の中で、6年生は人から求められ承認される自己肯定感の中で1日を過ごすこととなります。安心感と自己肯定感と言葉にするのは簡単ですが、その域に達するまでには様々な失敗や葛藤があります。コロナ禍で人との関わりが制限された中で育ってきた子どもたちには、相手の表情から思いを推測したり、適切な距離をとって関わったりすることの経験が足りない子がたくさんいます。それは今も変わりませんが、そういう子どもたちにとって安心感や自己肯定感は、いくつもの壁を乗り越えた先にあるものです。

昨年度の4月、当時の6年生は朝から1年生と関わり、学習を始めるための準備を支援し、交流を深めていました。そんな中、卒業生から引き継いだ「朝の挨拶運動」に専念する6年生がいました。どちらも尊く優先順位もないことなので特に気にしていませんでしたが、どんなときも、一人になっても挨拶運動に立つその子の気持ちを知りたくなり、声を掛けました。毎日挨拶運動をしてくれてありがとう、と言う私に、その子は「ぼくはまだ恥ずかしくて、1年生と上手にかかわれません」「でも、自分にできることがある。だからここにいるんです」と自信なさそうに答えました。その後、1年をかけ、様々な失敗や葛藤を繰り返し、いくつもの壁を乗り越え、一人の人間として成長していきます。

時は流れ、卒業式の朝。全校による「卒業生を送る会」を終え、教室に戻る6年生を一人の1年生が追い、ある6年生に近づきました。その前日、最後の挨拶運動をしているであろうその6年生に感謝状を渡したいと探していた1年生。1年間お世話になり、優しさに触れ、安心して学校生活を送ることができたことへの感謝を伝えたい。そんな気持ちで、感謝状を書いてきていましたが、会いたかった6年生は体調不良で欠席。でも、最後のチャンスである卒業の日に、思いが叶い、手渡して感謝状を渡すことができました。優しくお兄ちゃんに抱きつく1年生。受け止める6年生。二人の間には、他人には想像できない安心感と自己肯定観があふれていたことでしょう。

このような分かりやすい例ばかりではありませんが、こうした物語は学校の中で当たり前のように繰り返され、一人一人が根をのばし、しなやかな心が育っていきます。すべてが順調に進むわけはありません。むしろうまくいかないことのほうが多いかも知れない。だからこそ、私たち大人は目の前の結果に一喜一憂せず、事象を様々な視点でとらえ、子どもたちの未来を見据えて寄り添わなくてはならないと思います。